

2019年11月18日

国立大学法人徳島大学  
学長選考会議委員長殿  
学長選考会議委員各位

徳島大学教職員労働組合  
中央執行委員長 齊藤 隆仁

## 学内意向調査の結果に反する学長選考についての質問

徳島大学の発展のために日々ご尽力のことと拝察いたします。

さて、先日、学長選考にかかわる学内意向調査が行われました。その結果、西村候補が417票（有効票のうち55.9%の得票率）、野地候補が329票（同44.1%）と、僅差とは言い難い票差により、西村候補が1位となったとのこと。にもかかわらず、学長選考会議では、現職の野地候補を学長予定者として決定しました。

組合としては、10月8日付で学長選考会議委員各位あてに「学内意向調査の結果の尊重について」を送付しておりました。委員各位がそれに反する結果を出されたことについて、組合としては強い遺憾の意を表明します。

同文書に書きましたとおり、2位や3位となった候補者が学長に選ばれた大学では、学長や学長選考会議に対する学内の不信感が残り、学長がリーダーシップを発揮するどころか、学内が大きな混乱に陥っているようです。

また、民主的な選挙による代表者の選出の理論的基礎は、「理性的判断力を持った構成員が、十分に情報を与えられたうえで下した判断は、平均して50%を超える確率で正解だと考えられる。それゆえ、多数の理性的判断者による多数決の結果は正しい」というものです。そうした多数者の判断を差し置いて、2位の候補を学長予定者として決定するためには、相当強固な根拠が必要であると考えます。

ところが、学内向けに配信された通知文では、「徳島大学の理念・目標を実現するための将来構想と明確なビジョンを持ち、リーダーシップを発揮して徳島大学の強み・特色を最大限に生かした大学改革を推進することができる」といった抽象的な理由と、「改革の継続性を重視」という、現職が圧倒的に有利になる理由のみが挙げられているだけとなっております。もちろん、改革の継続性は重要ですが、他方、新学長の選考は、これまでの改革に対する反省の機会でもあります。新人候補の得票が上回ったということは、学内の意向としては、これまでの改革が必ずしも肯定的に評価されていないと考えられます。支持されていない改革をそのまま継続することは、妥当な判断とは思われません。

そこで、選考会議として、学内の意向に反して次期学長を選任する判断を下されたことに

対する重大な責任を果たしていただくためには、これまでなされてきた改革のうちで、学内で評価されていないと考えられる点を具体的に特定し、次期任期中の大学運営の留意点・注意点として新学長に伝えるべきであると考えます。また同時に、学内に対しても丁寧な説明が必要であると考えます。十分な説明による納得が得られない場合、今回の学長選考の結果に対する学内の不満から、円滑な大学運営に支障をきたすことも予想されます。

つきましては、下記のとおり、学長選考会議として、審議過程を公開するとともに、これまでの改革を支持するという判断を下された根拠につきまして、個々の改革内容のそれぞれについての総括的評価（とくに今後、修正や廃止すべき点）を具体的にお示しいただきますように、お願い申し上げます。

ご多忙のところ恐縮ですが、ご回答はおおむね 1 か月以内にお願ひできれば幸いです。また、ご回答は組合からの広報として学内に周知いたします。情報提供こそが、安定した大学運営の基礎であると考えてのことですので、ご了承ください。

#### 記

- 野地候補（現学長）を学長予定者として決定するにあたって、具体的な審議過程につき、ご説明ください。
- 野地学長によるこれまでの「大学改革」についてどのような点を評価し、どのような点を改善すべきと判断したのかにつき、根拠を示しつつ、具体的にご説明ください。

以上